

第二章・昔話と古典

わらしべ長者〈全二回〉

宇治拾遺物語

理解を深めるために

講師 荻原万紀子

私たちは漠然と「昔話」と言いますが、昔話の中には、明治や大正時代のできごとであれば、もっと古い時代からの言い伝えや神話・伝説もあります。その中から、今回は「わらしべ長者」を『宇治拾遺物語』という説話集に沿って読んでいきます。

観音様から授かったわらしべ一本が次々に、より価値の高いものに交換されていき、最後に主人公に莫大な富がもたらされる話です。

平安時代末ごろから鎌倉時代にかけて、説話集ブームがあつたようで、いくつもの説話集が編纂されています。当時は、貴族社会から武家社会に変わる時代であり、王朝へのなつかしさから、過去の貴族社会を取り上げた説話もあれば、庶民や地方社会に題材を求めた説話もあります。ただ、新興勢力である武士に関する説話は軍記物語に吸収されたのか、あまり見られません。また、平安時代後期になると極楽浄土

に往生することを願う浄土信仰が盛んになります。こうした世の中の動きを反映して、仏の靈験や高僧の逸話（エピソード）などを語る仏教説話も好まれました。今回の『宇治拾遺物語』は比較的仏教色が薄く「世俗説話集」に分類されます。『宇治拾遺物語』は鎌倉時代初期の成立で、編者はわかっていません。貴族社会・仏教界だけでなく民間に伝えられたものも含め多彩な説話が一九七編収められています。その中には『今昔物語集』をはじめ他の説話集と重なるものも多いのですが、その語り方に『宇治拾遺物語』の編者独自の見方、考え方が示されています。この作品の特徴は、いろいろな人によってさまざまに語られています。最大の魅力は、そこに描かれている人間の姿にあると言つてよいでしょう。当時の人々の生活感情も伝わってきますが、それだけでなく、現代の私たちと変わらない思い、人間性の真実というものが鮮やかに表現されています。

「わらしべ長者」は長い説話ですから、部分部分をカットして読んでいかざるを得ませんが、それでも、このような作品の魅力はきつと味わっていただけだと思います。

講師：荻原万紀子

## わらしべ長者（一・二）

### 宇治拾遺物語

#### 学習のポイント〈一〉

- 宇治拾遺物語とはどんな作品か。
- 観音から授かったものはなにか。
- 交換物の内容を読み取る。

#### 学習のポイント〈二〉

- 物語の結末を読み取る。
- 若者の態度の変化について考える。
- 若者の言葉の意味について考える。

### わらしべ長者

昔、身寄りも主人もなく、たった一人で生きている若者がいた。生活の方途を持たない彼は、長谷寺に参詣し、救いを求めて祈り続けた。二十一日がたった夜明け、「まづ速やかにまかり出でよ。」「まかり出でんに、何にてもあれ、手に当たらん物を取りて、捨てずして持ちたれ。」という夢のお告げがあった。寺を出たとたんに、若者は大門だいもんでつまずいて倒れた。

起き上がりたるに、あるにもあらず、手に握られたる物を見れば、わらすべといふ物を、ただ一筋握られたり。「仏の給たまぶ物にてあるにやあらん。」と、いとほかなく思へども、仏のはからはせ給たまふやうあらんと思ひて、これを手まさぐりにしつ々行くほどに、虻あぶ一つぶめきて、顔のめぐりにあるを、うるさければ、木の枝を折りて払

#### 現代語訳

起き上がったところ、思わず知らず、自然に手に握っている物を見ると、わらしべという物を、ただ一本いつの間にか握っていた。「仏がくださった物であるのだろうか。」と、たいそう頼りなく思うけれども、仏がお取りはからいになるわけがあるのだろうと思つて、このわらしべを手でもてあそびながら行くうちに、虻が一匹ぶんぶん羽音を立てて、顔のまわりにつきまとうのを、うるさいので、木の枝を折って払い捨てるが、それで

ひ捨つれども、なほただ同じやうに、うるさくぶめきければ、捕らへて、腰をこのわら筋にて引きくりて、杖の先につけて持たりければ、腰をくくられて、ほかへはえ行かたで、ぶめき飛び回りけるを、長谷に参りける女車の、前の簾をうちかづきてゐたる児の、いとうつくしげなるが、「あの男の持ちたる物は何ぞ。かれ請ひて、我に給べ。」と、馬に乗りて供にある侍に言ひければ、その侍、「その持ちたる物、若君の召すに、参らせよ。」と言ひければ、「私の給びたる物に候へど、かく仰せ言候へば、参らせ候はん。」とて、取らせたりければ、「この男、いとあはれなる男なり。若君の召す物を、やすく参らせたること。」と言ひて、大柑子を、「これ、のど乾くらん、食べよ。」とて、三つ、いとかうばしき陸奥国紙に包みて取らせたりければ、侍、取り伝へて取らす。

「わら一筋が、大柑子三つになりぬること。」と思ひながら京のほうへ歩いて行くと、長谷詣での一行に出会った。主人の女房は徒歩に疲れ、「水飲ませよ。」と息も絶え絶えである。一行は大騒ぎで水を求めるが、どこにもない。若者が大柑子を差し出して与えたところ、女房は息を吹き返した。間もなく遅れた荷が到着して、若者の前にはお礼のごちそうが並べられる。

物を食ふ食ふ、「ありつる柑子、何にかならんずらん。観音はか

もひたすら同じように、うるさくぶんぶんするので、捕まえて、(蛇の)腰をこのわらしべでひくくって、杖の先につけて持っていたところ、(蛇は)腰をくくられて、よそへは飛んで行くことができなくて、ぶんぶん飛び回っていたのを、長谷寺にお参りした女車の、前の簾を頭の上にかぶるようにして(外を眺めて)すわっていた子どもで、とても愛らしい感じの子どもが、「あの男が持っている物は何だ。あれを求めて、私にください。」と、馬に乗って(女車の)供として従っている侍に言ったので、その侍が、「その持っている物を、若君がお求めだから、差し上げよ。」と言ったので、「私がくださった物でございますが、このように仰せ言がございますから、差し上げましょう。」と言って、渡したところ、(女車の主が)「この男は、たいそう感心な男です。若君がお求めになる物を、あつさり差し上げたこと。」と言って、大きな夏みかんを、「これを、のどが乾いているだろう、食べよ。」と言って、三つ、たいそう香りのよい陸奥国紙に包んで与えたので、侍が、(これを)取り次いで渡す。

ごちそうを食べながら、「(女房に与えた)さっきの柑子は、何になるだろうか。観音がお取り

らはせ給ふことなれば、よもむなしくはやまじ。」と思ひゐたるほどに、白くよき布を三むら取り出でて、「これ、あの男に取らせよ。この柑子の喜びは、言ひ尽くすべき方もなけれども、かかる旅の道にては、うれしと思ふばかりのことはいかがせん。これはただ、心ざしのはじめを見するなり。京のおはしまし所は、そこそこになん必ず参れ。この柑子の喜びをばせんずるぞ。」と言ひて、布三むら取らせたれば、喜びて布を取りて、「わら筋一筋が、布三むらになりぬること。」と思ひて、わきにはさみて、まかるほどに、その日は暮れにけり。

翌朝、若者は道で、駿馬に乗った男に出会う。ところが、若者の目の前で、馬が突然倒れて死んでしまった。主人は下働きの男に後始末を任せて先を急ぐ。「この馬、わが馬にならんとて死ぬるにこそあんめれ。わら一筋が柑子三つになりぬ。柑子三つが布三むらになりたり。この布の、馬になるべきなめり。」と確信した若者は、後始末を自分に任せてくれと申し出て、布一むらと交換する。

男、よくやり果ててのち、手かき洗ひて、長谷の御方に向かひて、「この馬、生けて給はらん。」と念じゐたるほどに、この馬、目を見開くるままに、頭をもたげて、起きんとしければ、やはり手をかけて起こしぬ。うれしきこと限りなし。「遅れて来る人もぞある。

はからいになることだから、まさか何もなしに終わることはないだろう。」と思つているうちに、(女房が)白く立派な布を三巻き取り出して「これを、あの男に与えなさい。この柑子のお礼は、言葉には言ひ尽くしようもないが、こんな旅の道中では、(相手)が)うれしいと思うくらいのお礼はとでもできません。この布はただ、感謝の一端を表すのです。京のお住まいは、これこれの所です。必ず参上なさい。この柑子のお礼をするつもりですよ。」と言つて、布三巻きを与えたので、(男は)喜んで布を手にして、「わら一筋が、布三巻きになったこと。」と思つて、わきにはさんで退出するうちに、その日は暮れてしまった。

若者は、布一巻きを与えた男を十分遠くに行かせたのち、手を洗つて、長谷の御方角に向かつて、「この馬を、生かしていただきたい。」と祈念しているうちに、この馬は、目を見開くやいなや、頭をもたげて、起き上がるので、そつと手をかけて起こした。うれしくてたまらない。「遅れて来る人

また、ありつる男もぞ来る。」など、あやふくおほえければ、やうやう隠れの方に引き入れて、時移るまで休めて、もとのやうに心地もなりにければ、人のもとに引きもて行きて、その布一むらして、轡やあやしの鞍に替へて馬に乗りぬ。

京ざまに上るほどに、宇治わたりにて日暮れにければ、その夜は人のもとに泊まりて、いま一むらの布して、馬の草、わが食ひ物などに替へて、その夜は泊まりて、つとめて、いとく、京ざまに上りければ、九条わたりなる人の家に、ものへ行かんずるやうにて、立ち騒ぐ所あり。「この馬、京にゐて行きたらんに、見知りたる人ありて、盗みたるかなと言はれんもよしなし。やはら、これを売りてばや。」と思ひて、「かやうの所に、馬など用なるものぞかし。」とて、下り立ちて寄りて、「もし、馬などや買はせ給ふ。」と問ひければ、「馬がな。」と思ひけるほどにて、この馬を見て、「いかげせん。」と騒ぎて、「ただ今、替はり絹などはなきを、この鳥羽とばの田や米よねなどには替へてんや。」と言ひければ、「なかなか、絹よりは第一のことなり。」と思ひて、「絹や銭などこそ用には侍れ。おのれは旅なれば、田ならば何にかはせんずると思ひ給ふれど、馬の御用あるべくは、ただ仰せにこそ従はめ。」と言へば、この馬に乗り、ここ

がいたるといけない。また、先刻の男が（戻つて）来ると困る。」などと、不安に思われたので、やつのことで（馬を）物陰のほうに引き入れて、時が移るまで休ませて、（馬の）具合もものように（元気に）なったので、人のもとに引いて連れて行つて、持っていた布一卷きで、轡や粗末な鞍に交換して、（この）馬に乗った。

京のほうへ上るうちに、宇治のあたりで日が暮れてしまったので、その夜は人のもとに泊まって、もう一卷きの布で、馬草まぐさや、自分の食料などに交換して、その夜は泊まって、翌朝、たいそう早く、京のほうへ上ったところ、九条あたりにある人の家で、どこかへ行こうとする様子で、大騒ぎをしている所がある。「この馬は、京へ連れて行つたら、（この馬を）見知っている人がいて、盗んだのかなと言われたらつまらない。こつそりとこの馬を売ってしまいたい。」と思つて、「このような（旅の準備をする）所に、馬などが必要なものだよ。」と思つて、（馬から）下り立って（家に）寄つて、「もしもし、馬などお買いになりませんか。」と尋ねたところ、（相手は）「馬が欲しい。」と思つていたところなので、この馬を見て、「（せひとも欲しいが）どうしよう。」と騒いで、「今はちやうど、物々交換に用いる絹などはないが、この鳥羽の田や米などには交換してくれませんか。」と言つたので、「かえつて、絹よりは（そのほうが）何よりのことだ。」と思つたが、「絹や銭などが欲しいのです。私は旅の途中だから、田であれば何の役にも立たないと思ひますが、（あなたに）馬のご必要があるようでしたら、ただ仰せに従ひましょう。」と言つと、（相手は）この馬に乗り、試し

ろみ馳せなどして、「ただ思ひつるさまなり。」と言ひて、この鳥羽の近き田三町、稲少し、米などを取らせて、やがてこの家を預けて、「おのれ、もし命ありて帰り上りたらば、そのとき、返し得させ給へ。上らざらん限りは、かくてゐ給へれ。もしまた、命絶えて、亡くもなりなば、やがてわが家にしてゐ給へ。子も侍らねば、とかく申す人も、よも侍らじ。」と言ひて、預けて、やがて下りにければ、その家に入りて、みたりける。米、稲など取り置きて、ただ一人なりけれど、食ひ物ありければ、傍ら、その辺なりける下衆など出で来て、使はれなどして、ただありつきにあつきにけり。

二月ばかりのことなりければ、その得たりける田を、半らは人に作らせ、いま半らはわが料に作らせたりけるが、人の方のもよけれども、それは世の常にて、おのれが分として作りたるは、ことのほか多く出で来たりければ、稲多く刈り置きて、それよりうちははじめ、風の吹きつくるやうに徳つきて、いみじき徳人にてぞありける。その家あるじも、音せずなりにければ、その家もわがものにして、子孫など出で来て、ことのほかに栄えたりけるとか。

本文は『新日本古典文学大系』によった。

に走らせてみるなどして、「ほんとうに期待したとおりだ。」と言つて、この鳥羽の近くの田三町、稲少々、米などを与えて、そのまま自分の家を預けて、「私がもし命があつて京に帰り上ったならば、そのときお返しになってください。上京しない間は、(あなたが)こうして住んでいらしてください。もしまた(私の)命が尽きて、死んでしまつたりもしたら、そのまま自分の家にお住まいください。(私には)子供もおりませんから、とやかく申す人も、まさかおられますまい。」と言つて、(家屋・田地を)預けて、そのまま(田舎へ)下つて行つてしまつたので、(男は)その家に入り込んで、管理したのだつた。(もらつた)米、稲などを蓄えて、ただ一人だつたが、食べ物は(十分)あつたので、隣近所にいた下人などが現れて来て、(使用人として)使われなどして、(男はこの家に)そのまま住みつき居つてしまつた。

陰暦二月ごろのことだったので、その得た田を、半分は人に作らせ、もう半分は自分のために作らせたのだが、人に作らせたほうもできがよいが、その収穫は世間並みであつて、自分用として作つた田は、意外なほど多く収穫したので、稲をたくさん刈つておいて、それを手始めとして、風が(物を)吹き寄せるように財産ができて、大富豪として暮らした。その家の(もとの)主人も、音沙汰がなくなつてしまつたので、その家も自分のものにして、(結婚して)子や孫などもできて、格別に栄えたとかいふことである。